

日本全国産業博物館めぐり —地域の感性を伝える場所—

武田竜弥 編著

著者は、産業博物館の面白さは地域性にあり、地域の発展を支え、それと共に成長した企業の歩みには様々なエピソードがちりばめられていることであるという。産業博物館と科学博物館との違いはここにあり、モノたちとの語らいがあり、さらに、モノたちの由来や歴史を知り世に送り出した人々の心までも感じとるという。北海道から九州地区まで全国の産業博物館から94館を紹介した。そのいくつかを挙げる。

札幌でのビール製造は、明治初頭ドイツ式醸造法によるビールの製造が開拓使麦酒醸造所で始まる。北海道遺産の建造物に指定されている「サッポロビール博物館」は、巨大な煮沸釜、開拓使麦酒醸造所時代から現代までの国産麦酒の歩みや製造方法を紹介している。

江戸時代末期、釜石では日本初の洋式高炉を建設し、初出銑に成功。明治時代の殖産興業政策のもと日本における近代高炉操業の先進地となる。「釜石市立鉄の歴史館」は、江戸末期の高炉の原寸大模型やこれまでの鉄鋼産業の変遷を紹介している。

広く親しまれてきた交通博物館は、老朽化により撤退し、鉄道の地大宮に、2007年全国最大規模の鉄道博物館を設立した。「鉄道博物館」は、多くの実物車両を揃えるヒストリーゾーン、車両工場や施設を解説したラーニングゾーン等に区分けされ見応えのある博物館である。

印刷技術は、グーテンベルクの活版印刷術の発明によって、情報の伝達力が飛躍的に拡大した。「印刷博物館」は、凸版印刷が設立した博物館である。印刷の誕生から現代までを紹介し、印刷機などの実物を展示している。

ものづくりの中心ともいえる愛知県は、豊田

佐吉の自動織機に始まるトヨタグループの歴史と共に発展してきた。「産業技術記念館」は、旧トヨタ自動織布工場の跡地に設立された我が国最大級の産業博物館である。90台もの紡機・織機の展示やトヨタ初の試作車等を展示する。

大工道具は、日本建築の影の主演であり、民族遺産として道具を通じて工匠達の「技と心」を後世に伝えようと設立された。「竹中木工道具館」は、古代の石器から現代の電気工具までの展示、建築用木材や組み合わせ、道具の使用法、道具鍛冶や手づくりの名品の展示等がある。

石見銀山は、豪商が銀の採取に初めて着手してから歴史と共に支配者が変わっていった。「石見銀山資料館」は、石見銀山の文献資料や測量機器・用具類など豊富な資料を展示している。周辺には、ユネスコの世界遺産に登録された採掘現場や精錬場などの産業遺跡がある。

一農夫が「燃える石」を発見したことが三池炭鉱の起源とされるが、明治期の炭鉱開発によって三池は日本最大の炭鉱へと発展した。「大牟田市石炭産業科学館」は、大牟田と三池炭鉱の歩み、模擬坑道の見学、炭鉱の記録映像を視聴できるなどの展示等を揃えている。

その他、ヒゲタ資料館、紙の博物館、岡谷蚕糸博物館、かかみがはら航空宇宙科学博物館、島津創業記念資料館、水道記念館、インスタントラーメン発明記念館、大和ミュージアム等々の興味ある紹介が続く。

各々の紹介に、我が国の産業・技術史や企業創業者の思い、地域と歴史の関係が記述されている。博物館のモノ一つひとつが今後の我が国のものづくり技術・技能者育成に大きく貢献できる産業遺産である。生徒・学生・教員が、本書を参考に、産業博物館等の施設見学や体験できる機会をつくることは、ものづくり人材育成において大変有意義なことである。

(PHP研究所, 355頁, 903円) (田中 正一)